

アクティブ・ラーニング普及を目指した教育改革とその成果

全学初年次教育「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を通じて

塩川 奈々美

徳島大学高等教育研究センター

1. はじめに

本学では、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマ I 「アクティブ・ラーニング」に採択され、2015 年から全学部・学科必修 1 単位科目として「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～（以下 SIH 道場）」を開講している。SIH 道場は 1 年次前期に開講され、学部学科コースごとに 15 の教育プログラムを実施している。各プログラムにおいて、i 専門分野の早期体験、ii ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、iii 学修の振り返り、これら 3 つの設計項目が必須で求められている。

本発表では、これまでに蓄積された SIH 道場に関する学生アンケート・教員アンケートの結果に基づきアクティブ・ラーニングに関する意識の経年比較を行う。アクティブ・ラーニングの普及状況に関する現状を把握し、その課題を明らかにすることにより、これまでの取組の成果を明らかにするだけでなく、2020 年度以降の SIH 道場実施に向けた改善について議論する機会としたい。

2. SIH 道場の目的と実施体制

本学が文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマ I 「アクティブ・ラーニング」に採択された 2014 年度から学内には「大学教育再生加速プログラム実施専門委員会」（以下、AP 委員会）が組織された。AP 委員会は教育担当理事を委員長とし、学部学科コースから選出された教員や支援を行うセンター教員を中心とした AP 委員により構成される。大学全体が連携した実施体制をとることで、SIH 道場の円滑な運営を実現している。

学部学科コースより選出された AP 委員は各所属の「授業設計コーディネーター」としての役割も兼ねており、教育プログラムの設計・評価・改善の役割を担っている。さらに、実際に授業を担当する「授業担当者」との連携のもと授業の設計ならびに実施がなされており、これらの役割を担う教員が毎年度交代することにより、OJT 型 FD としての機能を果たしている。より多くの教員にアクティブ・ラーニング型授業を実践して

もらうことにより、大学全体の教育改革に繋げることを目指している。

一方、SIH 道場を受講する学生にとっては、専門分野の早期体験、基礎的なラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、能動的学修につなげるための振り返りの実践・習慣化という観点から、SIH 道場が成長の場となることが期待されている。各教育プログラムではこれら 3 つが必須項目として授業設計がなされており、入学して間もない学生たちに早期に体験、修得してもらうことにより、その後の大学での学びにつなげてもらう狙いがある。

なお、これらの実施体制は AP 補助金期間終了後の 2020 年度より、各学部学科コース単位でのマネジメントに移行する。これまで AP 委員会が行ってきたマネジメントと授業設計コーディネーターによる授業設計・実施・評価の流れを各学部学科コース内で取り組むことにより、補助金期間終了後も SIH 道場の継続的な運用を目指す。

3. アクティブ・ラーニングの普及に向けた取組

このような背景から、SIH 道場開講以来、従来の FD 活動に加え、アクティブ・ラーニングの普及に向けた様々な取組がなされてきた。AL の普及に向けた取組には、1. 実践事例を知る機会を設ける、2. 支援体制を整える、3. 成果を示すことが重要であり⁽¹⁾、全学 FD やワークショップを通じて「反転授業」「ポートフォリオ」「ルーブリック評価」等の教育手法モデルを推奨している（表 1）。

表 1 本学における AL 普及に向けた取組

■学生の学習を促進する事例カードの作成・公開(2)
■「SIH道場授業担当者FD」の開催（2015～2019年度）
■FDのeコンテンツ化・公開
■eポートフォリオシステム「mahara」の導入・活用
■全授業におけるAL、LP、FC導入率の目標値を設定し、導入状況を調査
■授業設計ワークショップの開催
■全学FD「スマートフォンを活用した授業改善WS」（2017～2018年度）

また、教育実践の取組内容やその成果、課題について学内外の研究発表や報告を通じて情報を発信・共有している (3) (4) (5)。

4. 調査概要

本発表で用いるデータは、2015年度から2019年度のSIH道場受講生を対象に実施した「SIH道場受講後学生アンケート」と2018年度から導入した「SIH道場受講前学生アンケート」の結果、授業担当者を対象に実施した「SIH道場授業担当者アンケート」(以下、教員アンケート)結果である。2019年10月28日時点での各種アンケートの年度別回答者数および回答率は以下の通りである(表2、表3、表4)。

表2 SIH道場受講前学生アンケート

	回答者数(人)	回収率(%)
2018年度	1,179	88
2019年度	1,146	87

表3 SIH道場受講後学生アンケート

	回答者数(人)	回収率(%)
2015年度	1,158	87.5
2016年度	1,261	94.3
2017年度	1,181	89
2018年度	964	72
2019年度	964	73

表4 SIH道場授業担当者アンケート

	回答者数(人)	回収率(%)
2015年度	54	33.9
2016年度	100	49.5
2017年度	90	41
2018年度	70	40
2019年度	31	27

5. アクティブ・ラーニング普及の成果と課題

SIH道場の受講生は全年度を通じて85%前後満足度を示しており、プログラムの評価の高さが窺える。また、受講前後のアンケート結果を比較すると、SIH道場設計必須指標の4点について、いずれも受講後における肯定的意見の増加が認められ、SIH道場の経験を通じて学生の意識が高まっていることが明らかとなった。一方で、プレゼン力や文章力の基礎理解など、緩やかに評価が下降している状況もある(図1)。

教員アンケートの結果をしてみると、「SIH道場の目標理解」「SIH道場の満足度」に関する肯定的意見の割合は初年度から上昇傾向を示し、2019年度ではそれぞれ96%、71%にのぼった。事業開始時における本学教員の意識が5年をかけて大きく変化し、SIH道場の取組に関する理解が広まっている。その他各項目

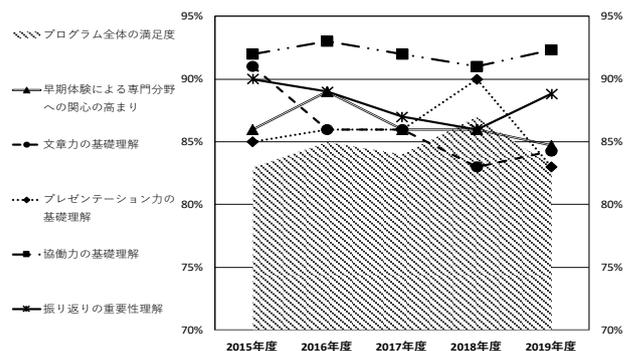


図1 SIH道場受講後学生の肯定的意見(年度別)

を見ていくと、「学生の学修の振り返り」は「意義を理解し実践可能、かつ他科目への導入について前向き」傾向にあること、「AL型授業」「ルーブリック評価」については「意義理解が進み、実践も可能であるが、他科目への導入に消極的」であること、「反転授業」「教員の教育経験の振り返り」については「意義は理解しているが、実践や他科目への導入が困難である」段階にあることを読み取ることができる。また、各年度で多少の増減は見られるものの、「教員の教育経験の振り返り」以外では肯定的意見が事業開始時からの緩やかな上昇傾向を示している。

6. まとめ

SIH道場は大学教育への導入段階として初年次教育の役割を果たしているが、一方で、高等学校教育の段階でアクティブ・ラーニングが導入されており、実施内容についても質の高さが求められている。教員間においても「反転授業」「教員の教育経験の振り返り」は授業を担当する教員の負担が大きく、導入までのハードルの高さが窺える。

2020年度SIH道場より、学部学科コース単位での自立した実施体制が取られる中、SIH道場の成果・課題を全学的に共有しつつ、学内の支援体制を検討していく必要がある。

参考文献

- (1) 佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間洋子・杉谷祐美子編(2016)『高等教育シリーズ171 大学のFD Q&A』pp. 63-64、玉川大学出版部
- (2) 「学生の学習を促進する授業事例カード」http://gakunai.tokushima-u.ac.jp/univ-only/jimukyoku/gakumubu/kikakushitu_a/index.html (最終アクセス2019年11月1日)
- (3) 川野卓二・久保田祐歌(2015)「徳島大学の教学マネジメントとAP採択事業「SIH道場」による全学へのアクティブ・ラーニング展開の試み」『大学教育と情報』2015年度(3)、pp. 19-21、私立大学情報教育協会
- (4) 久保田祐歌・吉田博(2016)「学修の振り返りを促進する授業設計:アクティブ・ラーニング型初年次教育プログラムの事例から」『京都大学高等教育研究』(22)、pp. 115-118、京都大学高等教育研究開発推進センター
- (5) 塩川奈々美(2019)「全学初年次教育を通じたAL普及に向けた取組とその課題」SPODフォーラム2019ポスター発表